

「嗚呼 満蒙開拓団」

☆☆☆

2009（平成21）年7月2日鑑賞＜松竹
試写室＞

演出：羽田澄子

製作：工藤充

2008年・日本映画・120分

配給／自由工房

＜羽田澄子氏の執念に拍手！＞

私は戦後生まれにしては「満蒙開拓団」という言葉はもちろん、その歴史的背景をかなり知っているつもり。しかし、09年6月12日付読売新聞における編集委員藤野彰氏の「中国細見」によれば、「『満蒙開拓団』って何だか知っている？最近、ある大学で日中関係について講義した折、学生に質問してみた。300人の大教室はいいんとしたまま。ぽかんとした学生たちの顔を眺めつつ、いささか脱力感を覚えた。」とのこと。今ドキの大学生の教育レベルからすれば、こりゃ当然？戦後64年そして満州国崩壊から64年経った今日の日本の問題点は、そんな中に顕著だ。

そうだからこそ、1926年生まれ羽田澄子氏が「今がこの映画を撮る最後のチャンスだった」と考え、多くの開拓団関係者から生々しい証言を集めて本作を完成させたことに拍手！娯楽映画を楽しむのもいいが、たまにはこういう映画できっちりと事実をそして歴史を勉強しなければ。

＜黒竜江省方正（ほうまさ）県に、なぜ日本人公墓が？＞

羽田氏が着目したのは、黒竜江省方正県にある方正地区日本人公墓。関東軍に侵略され開拓団に土地を奪われた中国人たちが、なぜこんな日本人のお墓を？それが本作製作のスタートだったらしい。

①1972年9月29日の田中角栄と周恩来の握手によって実現した日中国交回復、②1981年以降の厚生省による中国残留孤児の訪日、肉親探しの開始、③01年3名の元中国残留婦人による国家賠償請求事件の提起と全国各地での中国残留邦人による国家賠償請求事件の広がり、④07年の、改正中国残留邦人支援法の成立、という流れの中、中国残留孤児の問題は少しずつ解決していったが、満州国建国とは？満蒙開拓団とは？を考えることは、今を生きる私たち日本国民の義務のはず。それを考えるきっかけを与えてくれるこんな映画こそ、大学の自主上映会などで積極的に上映しなければ。

＜今の視点も大切！＞

こんなドキュメンタリー映画を観ると、下手すると一方的に日本の満州国建設が悪い、満蒙開拓団の派遣が悪いとなりがちだが、それはナンセンス。大切なのは、あの時代なぜこんな方向に進んでいったのかを考え、分析する中、今の日本国のあるべき方向を考えることだ。満蒙開拓団が始まった当時の日本国の合言葉は、「五族協和」と「大東亜共栄圏の建設」だが、さてその内容は？そしてこのスローガンはすべて悪？

他方、現在の北朝鮮のハチャメチャぶりは論外だが、現在着々と進んでいる中国の軍事力増強とりわけ海軍の増強による海洋国家への脱皮をどう考えるの？日中友好は大切なキーワードだが、こんな映画を観る中、そんなこんなを考える今の視点も大切だ。